

またひとつアベラシオン

高山 宏

都立大学助教授

このところ「知の最前線」なるところから少々脱線気味で、ドゥルーズもデリダもない益体もない仕事に明け暮れている。それが片はしからという感じで、ひよんな回路をへて唐突にライプニッツの名前と結びついていくことが多くて、実は驚きかつ呆れて、一体「ライプニッツ的なもの」とはなんなのかと考えこまされているのである。たとえば先日エディ・ラナーズという人が、人間がいろいろな分野でおかしてきた錯誤迷妄の文化史を総まくりした奇怪な本『イリュージョン』を翻訳して(河出書房新社近(2008)刊、思わぬコンテキストでライプニッツとばったり出会った。これは考えてみるほどいわば博物学者ライプニッツの面目躍如というエピソードで、物理学へのこのところのいやまさる関心のなかでこの三世紀前の哲学者が復権されるべきだとかねがね思っているほくなど、えたりと膝を打ったしだいなのである。簡単に紹介してみようか。

『イリュージョン』という部厚い本は、哲学、宗教がはぐくんできたもろもろのパラドックスからはじめて、罪もない子供たちを引っかけるよく知られたバズルのたぐいまでよくもこれだけ錯誤、錯覚、イリュージョン、パラドックスのたぐいを集めた、と思うのだが、とりわけ博物学を扱った部分は面白くて、こちらの想像力をいろいろ刺戟しないではおかない。泥濘や植物から動物がうまれてくると考えた「自然発生」説や、人間成人の小さな原型が精子のなかにそっくり入っているのだとする「前成」説など、想像力豊かな夢想の科学が次々に「錯誤」の科学史として紹介されていく。ライプニッツが出てくるのは、ガラクタ集めとエセ分類学に狂奔する十七、十八世紀のいわゆる「博物学」が「錯誤」の科学として紹介される個所である。たとえば一七二六年にドイツ版『雲根誌』でも言うべき鉱物の博物百科を出したアダム・ベリンガー。化石の表面に、花にとまる蜜蜂だの、炎を吹いて飛ぶ彗星などの絵柄が浮かび出た奇怪な石のコレクションが嵩じて、ヘブライ語やアラビア語の聖なる文字が刻まれた石を後生大事に集め回った人なのだが、ある日ついに彼自身の名前が浮かび出た石を発見して雀躍した。が、なんのことはない、いたずら好きの同僚学者たちが仕組んだいたずらだったのだ。そういった、どこまでが本当でどこからが「錯誤」かが判然としないような、そう、たとえば今日こうした伝統を継ぐ人、ユルジス・バルトルシャイティスが徹底的に集め、また彼自身もその徒であるところの曖昧な知、幻想の知の圏域に、忽如、しかし確実にライプニッツの、たとえば『プロトガイア』(K113)は属するのである。

『プロトガイア』からエディ・ラナーズが引いているのは「角獣の化石をめぐるくだりである。「一角獣」とは聖母マリアのお付き動物で、処女でないといこれを捕えられないと言われる、つまりは伝説上の架空動物である。その化石だって? 笑わせちゃいけないと言う前に、十九世紀以後の「精確科学」に毒され、ひたすら線型化される以前の、たとえば古くはラブレールや新しくはエラズマス・ダーウィンがそこに生きていた、文学的想像力と易々と共存し混淆していたバロック的前科学、疑似科学の世界の存在に思いを馳せてみなければならぬ。

オットー・フォン・ゲーリッケと言えば「マグデブルクの半球」の実験(1657)で真空の存在を実証した人。ものの